



凍えた街の 話

五華内しびよ

リモコンをいくら向けても電源が入らない。ブラウン管は、底の見えない淀（よど）みのように、何も楽しませてはくれない。

それでもナミはしつこくて、何かうかんで見えないか、真っ暗に映った自分の顔と、にらめっこが続く。

「ピンポ〜ン、ピンポ〜ン、ゴメンクササ〜イ！」

スイッチが入ったのは、テレビでは無くナミの方だ。居丈高（いたけだか）な言い回しは、ドアごしに居留守（いるす）を疑う大家さんの口真似（くちまね）だろうか。

ふるえるほど凍（こご）えるアパートの一室。不思議（ふしぎ）とナミは、寒がる様子も無い。

深く息を吸いこみ、もれないように両手で鼻と口をふさいだ。次はいったいなんのまねだろう。

しかし、心配には及ばない。案の定、顔も赤くならないうちに、もう早や我慢（がまん）が続かない。

「……ぷはっ！」

苦しまぎれの溜（た）め息を、凍えた部屋にはき出した。またたくうちに冷やされて、煙（けむり）のように尾を引いて行く。

まるでロシアの空に現れた、いつかの巨大隕石（きよだいいんせき）。テレビの中のふくれっ面（つら）へ、見る見るうちに衝突（しょうとつ）をした。

偶然（ぐうぜん）の仕業（しわざ）に、得意顔（とくいがお）がうかぶ。ナミのしたことだから愉快（ゆかい）なのだ。

「ウウウ」とうなり声をわかせる、番組を見せない仕返しとばかり、次から次へ新手（あらて）を放ち始める。

「ハッ！」

真冬の12月にストーブの火の気が無くて――

「ハッ！」

それでもナミは、裸（はだか）にタオルケットを巻きつけただけ。

どれほど恨（うら）んでいただろう。テレビがかわいそうに見えたころ、ようやく執着（しゅうちやく）は解けた。

ナミはその場に立ちすくみ、目玉を上にごよろぎよろさせている。すると、黒目がピタリと止まり、何かを思いついた様子。

顔だけ後ろを向くと、じろり。横目で見据（みす）えた先にナミの母親がいて、やれやれそちらを的（まと）にまた始まった。

溜め息が、母親めがけてのびて行く。隆々（りゅうりゅう）と、白く水蒸気（すいじょうき）が凝結（ぎょうけつ）をくり返す。

ところが、ぶつかる手前で見る見る勢いはおとろえ、あっという間に蒸発して消えた。選んだ的が遠かったのだ。

「ハーッ！」

だからやり直してもう一度。今度は、勢いがある。

「ハーッ！」

けれども一緒。テレビと同じだけ近づけば良いのだ。

くり返すほど募（つの）る思いはやがて、ナミを制御不能（せいぎよふのう）にさせて行く。

何かに取りつかれたように、もう楽しそうでは無いし、喉（のど）のおくまで乾（かわ）いただろう。それでもナミは、我慢（がまん）くらべを止（や）めようとしなない。

「ハーッ！」

肩で息を始めると、顔から血の気が引いて、しだいに勢いも弱まって行く。

そのうち目玉をひっくり返して、ベタンと尻（しり）もちをつく意地（いじ）の張りよう。ぶつけたところをさすりながら、それでやっと諦（あきら）めた。

ナミは、立ち上がらずに四つんばいをして、ふらふら母親のもとへ近づいて行く。

後ろから、瘦（や）せた腰（こし）につかまると、遠慮（えんりよ）がちにゆさぶって、始めは甘えるしぐさに見えた。

ところが、ナミは急に興奮（こうふん）し始めて、場面は一転（いってん）ケンカをしかけているようだ。

「うん！ うん！ う～ん！」

床（ゆか）にねじれた体を、ナミが乱暴（らんぼう）にゆらし、さらにどこでも掴（つか）んで力いっぱい返（かえ）そうとする。

そばにころがる掌（てのひら）へは、リモコンを何度も強く押し当て、預けるつもりでいるらしい。母親が、丸太（まるた）のように心が無いことを、分かっているはずなのに。

ナミのスキンシップはどれも一方的で、それに、なかなか収（おさ）まる気配がなかった。

「う～ん！ う～ん！」

相変わらずのうなり声。どうにも満足いかない様子。

遂にリモコンを放り投げ、母親が着るコートの袖（そで）に縫（ぬ）い付けられた、透（す）き通るオレンジ色のボタン目がけて噛（か）みついた。

「ピンポ～ン、ピンポ～ン、ゴメンクササ～イ！」

カーテンの無い窓は、黄昏(たそがれ)が暗幕(あんまく)を引いて宵の口(よいのくち)。部屋の全てが影と成り、沈(しず)み始めた氷の床(ゆか)に、母親のあわれな姿が滲(にじ)む。

思いもよらず命が果(は)て、うつぶせに崩(くず)れた体は今も硬直(こうちよく)をしたまま。

だから、昼間したナミの力まかせは、どれも思い通りに行かなかった。そのせいでパニックを起こしたナミが、自分で自分の手の甲(こう)を血がにじむまでかみしめたけれど、今では意に介(かい)するそぶりも無い。

「ピンポ〜ン、ピンポ〜ン、ゴメンクササ〜イ！」

真夜中にひびいたのは、お決まりのセリフ。影絵のナミが雪明りに浮(う)かぶ。

母親につまずかないよう目をこらし、両手でタオルケットの裾(すそ)を持ち上げ、今夜も凍(こご)える部屋を駆(か)けめぐる。

三日三晩ねむらずに明かした、気の遠くなるほど長い時間。朝まで続く奇想天外(きそうてんがい)は、移(うつ)ろう心模様(こころもよう)に身悶(みもだ)えているようで切ない。

こみ上げては静まり、竦(すく)んでは立ち向かう。逆境にへこたれぬ健気(けなげ)さは胸を打つけれど、ここからぬけ出す手立てを思いつけないのだから情けない。

空(から)のバケツへ迷いこみ、グルグルとはい出せずにいる夏の虫のように、底を逆(さか)さに返してくれる、慈悲深(じひぶか)い通りすがりを待つより他は無い。

やっと長い夜が明けて、今朝は何もきこえない。ナミは走り回っていないし、部屋のすみにもうずくまっていなかった。

ミカンの皮や空になったマヨネーズの容器。氷の床（ゆか）の母親は、散らかる物の中でうつぶせのまま。しかし、いつもと様子が違っていた。

頭の上には、ナミのタオルケットがかけられて、顔のそばでたたんでいたはずの右腕（うで）も、下からはい出たみたいにテレビに向かってのびている。青白い指が、リモコンを掴（つか）んで凍っていた。

滞（とどこお）る零下（れいか）の世界。雪と氷にとざされた物憂（ものう）げな街の片すみ。窓に迫（せま）る無情の景色は、忘れ去られた吹（ふ）きだまりの下に、あとどれだけ二人を閉じこめるだろう。

裸（はだか）のナミを、奥の4畳半（よじょうはん）で見つけた。寢床（ねどこ）の上にあお向けでいて、布団をけとばし、枕（まくら）を畳（たたみ）に転がせている。とりあえず今日まで、危（あや）ういが手ごわくて何よりだ。

例えばナミは、未来を想像することが無いという。頭の中で引き起こす、生まれながらの障害のせい。数ある個性のこれもひとつだとか。

「明日を臆（おく）せず、今を限（かぎ）りに生きぬいて行く」そんな潔（いさぎよ）さをも兼（か）ね備（そな）えるのか。

——玄関（げんかん）でドアを叩（たた）く音がする——

とうとうやっと来てくれた！ さあ、早くここへ。

薄目（うすめ）がわずかに輝（かがや）いた。「ホン」と、ひとつむせたけれど、どこに残していただろう。ドロップが、口から糸を引いて飛び出した。

ほどなく辺りは静まって、しかし、まだ中をうかがう気配がしている。玄関が開くのを、そして呼ぶ声を、今かと待ちわびたのもつかの間。

「スッ」と、ドアのポスト口からチラシが差し込まれ、雪をふみしめる足音が、せわしく次の戸口へ消えてしまった。

張りつめた空気は一瞬（いっしゅん）にして解け、その代わり、漲（みなぎ）るものが消えて行く。ナミを見ればそう分る。延々と、救われぬ時だけが刻（きざ）んだ1秒のなんともどかしい。

大きな喉（のど）の吸いこむ音がした。

ナミのむらさき色のくちびるが「ふっ」と、息を吐（は）き出した。

命が旅立つ最期の合図（あいず）。

ゆるんだ瞳（ひとみ）が彼方（かなた）を見つめて、こめかみを、涙（なみだ）がひとすじ流星（りゅうせい）みたいに流れて落ちた。

ナミの物語はこれで終わり、救（すく）われぬ時だけが今日を刻み続ける。

午前のうちに、長く居座（いすわ）った雪雲は消えて、しばらくぶりに太陽を見た。日差しが、畳（たたみ）を黄金（こがね）に浮かばせながら、みるみるナミへ寄せて来る。

ほどなく窓（まど）の格子（こうし）が影を落とせば、寝床（ねどこ）はどこも明るくなって、頬（ほお）は橙（だいだい）色に染まり、日向（ひなた）ぼっこのうたた寝をながめる気がした。

不意に、音もなく小さなものが転がって行く。

コロコロとひとつ。ナミの体をかけ下りて、畳（たたみ）に映る日だまりの上を、オレンジ色の綺麗（きれい）な影と並んで進む。

さっき、なめていたドロップ。

——いや違う。ああ、あれは——

畳縁（たたみべり）をはねたら勢いを無くし、それでもゆらゆらと弧（こ）を描きだす。

最後は、サンタの姿の赤い折（お）り紙や、銀色の松ぼっくりが散らばる中を進んで、初めから決めていたように、タンポポの絵のかわいい飯茶碗（めしぢゃわん）に、カチンとはねて上を向いた。

人も車もカラスも——朝から無関心を決めこんで、窓（まど）の外は、物音一つしない。

その代わり、不思議な気配がナミの寝床（ねどこ）を取り巻いた。

主（あるじ）を無くした、この部屋のとまどいなのか。まるで潮騒（しおさい）のように、ざわざわと無数の念（ねん）がわき起こり、寄せてはまとわりつくようだ。

壁（かべ）の中で柱（はしら）たちが、するどい音で身をきしませて、こちらはやり切れぬ思いでいるらしい。

誰か——

忘れたふりをやめて、この部屋の様子を確かめに来てもらえないか。

すでにおそくても、見つかって、このありさまが日の目を見れば、世間はつかの間反省をするし、報（むく）われなかった日々へ同情もしてくれるはず。大家さんには、溜（た）めた家賃（やちん）をふくめて、大迷惑（だいめいわく）な話だけれど。

それに、仕事とはいえ警察もだ。

事件を疑いながら部屋の検証（けんしょう）を始め、それならナミが吐（は）き出した、透（す）き通るオレンジ色のボタン。

母親の、袖（そで）のちぎれたあとを怪（あや）しんで、飯茶碗（めしぢゃわん）などには目もくれず、きつとつまみ上げるのだ。

窓（まど）にすかせば、ついた歯形を目ざとく見つけて、新聞記者やヤジ馬や、テレビカメラをかき分けながら、事件の場合の手がかりとして、きつと持ち帰るのにちがいない。

そんなてんやわんやを、どこか高い遠くから、ナミは眺めていてほしい。

照れるわけでも嘆（なげ）くわけでも無く、許すも許さないも、あんなに短い一生を、他人（ひと）と比べようもないのだから仕方ない。

魂（たましい）が解き放たれ、寒い思いやひもじさからも開放されて、それならせめて「やっと救（すく）われたんだ」と、凍（こご）えた街を見下ろせばいい。

けれど――

変わり果て、荒涼（こうりょう）としたこの部屋の景色にも、二人の面影（おもかげ）は、蘇（よみがえ）る。そして、人知れずささやかであれ、息（いき）づいた日々は、まぎれもなく閃（ひらめ）いていた。

卑（いや）しい暮らしの中で、すまなそうに呼吸を続ける人たちがいる。命の尊厳（そんげん）を、背負う宿命もいつかどこかへ置き忘れて、なんとかやっと生き伸びている。

その存在に、世間はいつまで見て見ぬふりをするのか。正義（せいぎ）を暗まし見限（みかぎ）るつもりでいるだろう。

「死んだ方がまし」だとか。「生まれ変われ」ば楽だとか。その場しのぎの無責任。

励（はげ）ます声や見送る眼差（まなざ）しも無く、ナミは独（ひと）りぼっちで凍（こご）えていった。

今日、この凍（こご）えた街中のだれ一人も「救（すく）われたはずが無い」。そう思い直して、ひどく悲しかった。

（終わり）

凍えた街の話

<http://p.booklog.jp/book/69332>

著者：しびよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sibiyo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69332>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69332>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ